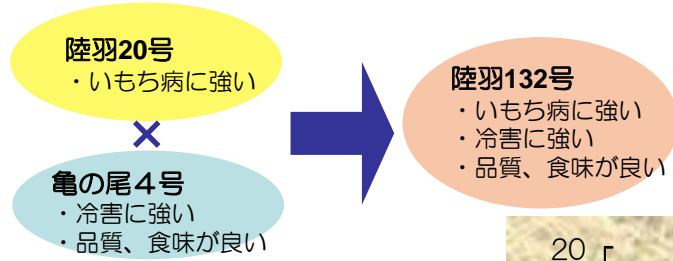


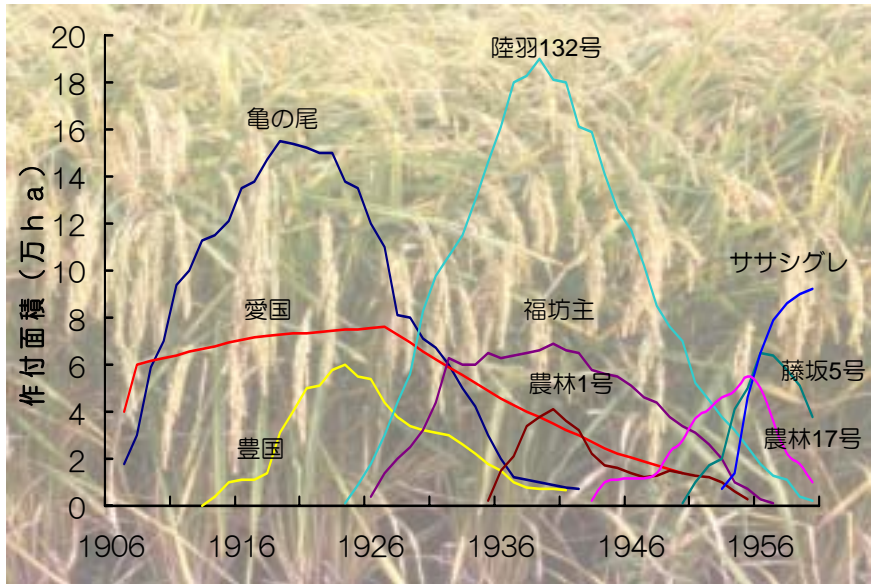
# 「陸羽132号」とその子供たち

## 1) 日本で初めて交配を使った品種

「陸羽132号」は、「交配」を使って育成された日本で初めての品種です。  
 1905年と'06年（明治9、10年）の大冷害、1910年のいもち病大発生などで、当時東北地域では、冷害といもち病に強い品種の育成が望まれていました。当時、東北地域で広く栽培されていたのは、冷害に強く、品質の良い「亀の尾」で、いもち病に弱い欠点を補うため、いもち病に強い「愛国」が注目されました。そこで、それぞれから純系分離で育成された「亀の尾4号」と「陸羽20号」の交配を1914年に行い、選抜を繰り返して1921年に「陸羽132号」が育成されました。



東北地域における水稻品種の移り変わり



## 2) 昭和前期の大物品種

「陸羽132号」は、「亀の尾」よりも冷害に強く、1934、35年（昭和9、10年）の東北地方の大凶作を救いました。その後、作付面積を急速に伸ばし、東北6県を含めた全国16の県で奨励品種に指定され、1929年から52年までの24年間、東北地方で作付面積1位の座を保ち続けました。

## 3) 陸羽132号の子供たち

「陸羽132号」の血は、「コシヒカリ」や「ササニシキ」をはじめ、東北の良食味品種である「あきたこまち」、「ひとめぼれ」など、さらに西日本の良食味品種「ヒノヒカリ」など全国の主要な品種に受け継がれています。

